

『ビルマの豎琴』の分析

— 国語教材研究のために (三) —

一 分析の方法

竹山道雄(一九〇三—)が昭和二二年から二三年にかけて、雑誌「赤とんぼ」(実業之日本社刊)に連載した『ビルマの豎琴』は、最初「児童向の読物」^①として執筆されたが、「思想小説」^②として捉へる読み方もされるといつた具合に、児童から成人まで、広汎な読者層に訴へる高い普遍性を有する作品である。その秘密を探るのが、本稿の目的とするところである。

私は、国語教材の分析は、一般の文芸作品や読み物を読解する際に行ふ作業と、本質的に異なるものではないと考へてゐるところから、以下、この作品を読解して行く手続きは、そのまま本作品を国語教材として分析する際の方法としても適用できるものであると考へる。そこで、私が通常、文芸作品等を読解する際に履む手順は、次に示す通りである。

(一)構成……………物語の筋の進め方を追ふもので、なるべく章段に分けて、各の要旨を捉へると同時に、各章段の關聯のさせ具合を調べる。

橘

豊

(二)登場人物……………登場人物をぬき出して、それぞれの特徴・性格がどのやうに描き分けられてゐるか、また各人物がこの作品において果してゐる役割を検討する。

(三)主題……………作者がこの作品を通じて読者に最も強く訴へかけようとしてゐる事がらは何かを考察する。短篇小説のやうに、主題が単一に絞られるものもあるが、長編小説、或いは本作品のやうに、それほど長編でなくても、特殊な成立事情のために、複数の主題を想定し得る場合もあるので、検討を要する。

(四)価値……………当該作品がすぐれた作品であるといふのは、どのやうな点によつてであるか。作品の意義について考へる。

(五)作品の見所……………特に興味を惹く点や、注意すべき点を指摘する。この作品の特色・表現上のすぐれた箇所を見出すことも含まれ、作品を味はつて読む際の参考となる事項の抽出である。

そして、以上の各項目について記入できる空欄のある、作品分析表を用意することが望ましい。何故ならば、この作品読解時に使用した分析表は、教材分析表としてそのまま応用できるものであり、教材分析表を基礎にして指導計画表（指導案）は作られるべきものだからである。

ところで、『ビルマの堅琴』の場合は、最初雑誌に掲載されたものが、単行本に収録される時、全面に亘つて補筆・訂正が加へられたといふ事情がある。そこで、初発表時本文と改訂後の本文とを校合・検討することにより、著者の執筆意図や表現上の重点の置かれ方等を探ることができる。但し、この方法は、本書の場合は有効であるが、作者が有意意味な加筆を施してゐない作品には、適用できないわけで、どんな作品にも適用可能な万能的方法といふわけではないことを、断つておかねばならない。

二 構 成

この作品は、(一)まへがきに相当する部分と、(二)第一話「うたう部隊」(一・四)、(三)第二話「青い鸚哥」(一・一〇)、(四)第三話「僧の手紙」(一・八)との四部から成り立つてゐる。

(二)まへがきに相当する部分——では、第二次大戦終了直後、外地から復員してくる兵士達の中に、非常に元気な一隊があつたこと、それは、隊長が音楽学校出の若い音楽家で、隊員に合唱を指導し、苦しい時も退屈な時も歌を歌つて、はね返してきたからであることを述べて、次の第一話「うたう部隊」の導入の役割を果してゐる。また、「この隊にいた一人の兵隊さん」が物語る物語であるとして、以下の物語の語り手がどういふ立場の人であるかを規定してゐる。第一第二話において、作者が述べようとしてゐる、戦場にあつても常に唇に歌を忘れることのなかつた軍隊、といふ素材を概括すると同時に、「義務をつくして苦しい戦いをたたかつた人々のためには、できるだけ花も実もある姿として描

きたい、という気持がありました⁽³⁾」といふ、本作品執筆時の作者の姿勢をも、併せ示してゐる。

(二)第一話「うたう部隊」——戦争末期、南方ビルマ戦線で、敗走を続ける日本軍の中に、音楽学校出の隊長に率ゐられた一部隊があつた。この部隊は嬉しい時も辛い時も歌を歌ひ、戦闘と死の恐怖に直面しながらも、充実した毎日を送つてゐた。隊員の一人である水島安彦上等兵は手製の堅琴を弾き、ビルマ人の服装をして斥候に出れば、敵兵の接近を報らせたりして、味方の危急を救つたことも何度かあつた。やがて、部隊はイギリス軍に包囲される。最後の決戦を目撃にして、弾薬運搬車を隠す間、一時敵の注意を逸らすために、水島の堅琴に合せて隊員たちは「植生の宿」を歌ふ。すると、イギリス軍の中からも、同じ、*Home, sweet home* を唱和する歌声が起り、血戦は回避される。第二次大戦は、既に三日前から停戦になつてゐたのであつた。

(三)第二話「青い鸚哥」——部隊は全員イギリス軍の捕虜となり、収容所生活が始まる。一方、いまだに終戦を信じない日本軍部隊があり、三角山に立て籠つて徹底抗戦を続け、このままではイギリス軍の総攻撃を受けて全滅するのは目に見えてゐる。そこで、友軍の生命を救ふために、降伏勧告の特使として水島上等兵が三角山に派遣される。そのまま水島の消息は途絶え、やがて捕虜部隊はムドンの町に移される。隊長を始め隊員たちは皆、水島の安否を気遣つてゐる。その中に、日本兵に好意的な物売り婆さんが、水島は美事に任務を果して友軍を救出した後、戦死したらしいといふことを伝える。ところが、ムドンの町で労務に服役してゐる隊員の前に、水島にそっくりのビルマ僧が現はれ、水島は生きてゐるのではないかといふ疑惑を抱かせる。隊員が収容所内で例のやうに合唱してゐると、それを聞きに集まつてくるビルマ人の中に、水島に生きた写しのビルマ僧の姿も混つてゐる。それとは別に、ビルマ僧に姿を替

へた脱走兵が、隊員の様子を探りに現れたことから、水島もことによると脱走して、ビルマ僧になり澄ましてゐるのではないかといふ疑念が持たれたりする。水島によく似たビルマ僧が、いつも肩に青い鸚哥を止らせてゐるのを見て、隊長は弟の鸚哥を手に入れると、「おーい、水島。一しよに日本にかへらう／＼」といふ言葉を教へこみ、それをビルマ僧に贈る。部隊が日本へ送還される前日、両肩に兄弟の鸚哥を止らせたビルマ僧は、隊員たちの合唱に合せて堅琴をとり上げ、Home, sweet home の曲を、次いで「仰げば尊し」の別れの曲を掻き鳴らして立ち去る。

〔四〕第三話「僧の手紙」——件のビルマ僧は、やはり水島上等兵であつた。彼は隊長宛に長い手紙と、兄の鸚哥とを届けてきた。水島の飼つてゐた兄鸚哥は、「ああ、やつぱり自分は帰るわけに行かない／＼」と叫ぶ。そして、日本へ向ふ船上で、隊長は水島からの手紙を隊員によんで聞かせる。その手紙には、水島が三角山の日本軍の陣地へ降伏勧告に乗り込んだ時から、戦闘に巻きこまれて死線をさ迷ひ、九死に一生を得、その後ビルマ僧の姿になつてゐる日本兵の残骸を目撃し、その火葬・霊安を自分に課せられた使命と感ずるやうになつたこと、そして、この使命を果たすためには、虜囚の身でなく、ビルマ僧である方が活動し易く、遺骨収集が終るまでは、この国に留まる決意であること……が記されてあつた。そこで初めて隊員たちは水島の本心を理解し、彼の選んだ生き方に共感するのであつた。

三 登場人物

（一）水島安彦——風貌は中背で瘠せ形、日焼けして真黒な体軀、大きな凹んだ目は、ビルマ人に似てゐる。隊長から音楽を教はり、堅琴の名手

となる。歌ふ部隊の人気者で、大活躍をする。イギリス軍の捕虜となつてからは、三角山の日本軍の許に、日本兵として唯独り降伏勧告に向ひ、消息を断つ。その後の行動は、第三話の隊長宛の手紙の中で、詳細に物語られる。沈着で勇気があると共に、一面ユーモラスなところもある人物として描かれてゐる。また、内省的傾向も顯著で、一旦決意したことは飽くまで完徹するといふ、強固な精神力の持ち主でもある。それは、三角山に立て籠る友軍を、死を堵して説得する条、異国の山野に散乱する日本兵の遺骸を葬り終るまでは、他の隊員の勧めをもふり切つて日本に帰らうとはせず、独りビルマに留る条等に表れてゐる。そして、その内面に燃えたぎる情念は、同朋の亡骸を傷むヒューマニズムから発して、やがて宗教的情熱へと昇華して行くのである。

（二）隊長——水島の属する部隊の指導者。音楽学校を卒業したばかりの若い音楽家。隊員に合唱を指導し、日本の歌曲や歐米のホームソングを歌はせる。冷静で思慮深いと共に、部下思ひの温情家でもあり、特に水島を単独で三角山に向はせたことについて、部下を見す見す危険な死地に追ひやつたといふ自責の念に駆られる。水島の生存を確かめるのに種種手段を尽し、ビルマ僧が実は水島らしいと目星をつけてからは、鸚哥に「おーい水島、早く一しよに日本へ帰らう」という言葉を教へこんで、ビルマ僧の許へ届けさせる。最後に、どうしても隊へ戻らない水島の立場に、逸早く理解を示すのも、この隊長であつた。

（三）古参兵——「まじめな実直な人」と記されてゐるやうに、日本の軍人の最も典型的なタイプとして描かれてゐる。隊長が、水島は戦死したのでなく、脱走兵となつて収容所の周囲に出没するのではないかといふ疑惑に捕はれ、ふさぎこんで食事も碌に摂らなくなつたとき、「隊長、残念ではありますが、水島のことはもうおあきらめください。あれが生きているはずは所詮ありません。水島はあの三角山で立派に死んだの

です。使命を果たして、自分のいのちをすてて、他の多くの同胞を無駄死から救つたのです。とうとい犠牲になつたのです（中略）部下を可愛がつてくださったのはありがたいですけれども、そのためにいま隊長が健康をそこなわれては、この隊のためにも大へんです」と言つて諫めるのである。

（四）物売りの婆さん——捕虜収容所に出入を許されてゐる、日本語を話す現地人の老女。収容所の中といふ、一種の監禁状態に置かれてゐる隊員が、外部から水島についての情報を得るために利用される。最初、水島は戦死したらしいといふ情報を齎し、また後には、ビルマ僧と隊長との間の鸚哥の交換といふ、物語の進行上重要な役割を果たす。

（五）脱走兵——ビルマ僧に扮して、戦友が日本に帰国する日時を探り出そうとして、卑屈な態度で隊員に接近してくる。水島上等兵が、かく成つてゐるかも知れぬといふ、一つの可能性を示すものとして描かれてゐる。

（六）隊員たち——古参兵を除いた隊員の兵士たちは、常に集団として描かれてをり、議論を交すことはあるが、一人々々個別に描き分けられてゐるわけではない。ただ、この物語の語り手は、その中の一人といふ設定になつてゐる。

（七）その他——三角山を死守すると息巻く部隊の隊長、カチン族の酋長やその娘など、様様な登場人物があり、それぞれ、この作品の内容を豊富に肉付けするのに役立つてゐる。

四 主 題

主題とは、作者が作品を通じて読者に訴へようとする、いはば根源的な情熱の発現ともいふべきものであり、一つの作品には一つの主題が存在するのが常識であるが、本作品の場合は、特殊な成立事情のために、単

一の主題で統一されてゐると見做すには無理な点があり、複数の主題が共存してゐると認むべきである。

（一）その一は、音楽の徳を讃へることである。即ち、音楽（芸術）は人を楽しませ慰めるばかりでなく（もしくは、楽しませ慰めることによつて、といふべきかも知れないが）、人々に苦境を乗り越える勇氣と、生きる喜びとを与へるものだといふことを示すことにあつた、と解することが出来る。日本古来の物語や説話文学の中には、音楽の持つ靈妙な超能力によつて、窮地を救はれたり、生命の危機を脱したり、面目を施したりするといふ類型がある。この説話も、さうした伝統的な説話の類型に則つたものであるとみることができよう。しかも、この作品が書き上げられた時代背景を考へるに、第二次大戦後の物資の欠乏と精神的荒廃の時期において、わが国は平和を愛する文化国家として更生しようとしてゐた時期である。音楽（文化）は言語（文化）のやうな *nationality* の強いものに比して *international* なものであり、この物語が、一種の楽徳説話として組立られてゐることには、終戦直後の日本人の、*nationality* を棄てて *universality* に帰一したいといふ悲願が籠められてゐたやうに思はれるのである。しかしながら、この主題は、第一話では一貫して強調されてゐるが、第二話・第三話と進展するにつれて、新たな主題の登場に伴ひ、背後に後退して行くことになる。

（二）その二は、部隊から離れた水島が、戦友の遺骸を葬ふために、ビルマ僧となつて、独りビルマの地に留まるといふ条である。これも、わが国の古来の説話の中に、出家遁世して死者の後世菩提を弔ふ物語、或いは仏道に帰依する発心譚として、数多く伝へられてゐるもので、物語の類型としては、それを踏襲したものといへよう。そして、この作品においても重要なのは、水島に菩提心を起さしめたのは何であつたかといふことである。

第三話「僧の手紙」によれば、水島が発心を決意するに至つたのは、ムドンの町へ移動した本隊を追つて旅を続ける途中、日本兵の亡骸を幾つか葬りながら、遂に手に負へなくなつて大部分は見棄てて、白骨街道を南下し、漸く部隊のある町に辿り着いた日、イギリス軍が日本兵の亡骸を無名戦士の墓に手厚く葬り、讚美歌を歌ひ、厳肅で盛大な葬儀を挙行してゐる光景を目撃した時以来であつた。その時の水島の心の動きを、「僧（実は水島）の手紙」は次のやうに伝へてゐる。

何ともいへぬ慚愧が私の体ちゆうを熱くしていました。——私があの濁流のほとりに折り重なつてゐるものを見すて、そのままに立ち去つたことは、何という恥ずべきことだつたでしょう！

異国人がこういうことをしてくれてゐるのです。治療し、葬つて、その霊をなぐさめるために折つてくれてゐるのです。私はあのシツタン河のほとりの、それからそのほかまだ見えない山の上、森の中、谷の底の、このビルマ全国に散乱してゐる同胞の白骨を、そのままにして置くことはできません！

祖国のために戦つた兵士の遺骸が、顧られずに異国の山河に打ち棄ててあることは、遺族はもとより同胞として忍びないことである筈だ。日本政府が遺骨収集団を派遣するやうになるのは、この小説が発表されてから遙か後日、サンフランシスコ講和条約発効後のことであつた。そして著者自身

当時は、戦死した人の冥福を祈るやうな気持は、新聞や雑誌にはさっぱり出ませんでした。人々はそういうことは考えませんでした。それどころか、「戦つた人はたれもかれも一律に悪人である」とい

つたやうな調子でした。日本軍のことは悪口をいうのが流行で、正義派でした。義務を守つて命をおとした人たちのせめてもの鎮魂をねがうことが逆コースであるなどとい⁴われても、私は承服することはありません。逆コースでけつこうです。

といつてゐることからも窺はれる通り、この小説に、作者が戦歿兵士たちへの慰霊の意味を籠めようとしてゐたのは確かである。更に「僧の手紙」は次のやうに述べてゐる。

（前略）魂が休むべきせめてささやかな場所をつくつてあげるのではなくて、——おまえはこの国を去ることができるのか？

おまえの足はこの国の土をはなれることができるのか？

おまえはかえれ。おまえは踵をもとへもどせ。おまえはここに来るまでのあいだに見たもののことを、もつとよく考えよ。それとも、おまえはこのままに行く気か？ ふたたびあの北の地方にかえるだけの勇氣はないのか？ よもや、おまえは——？

こういうげいしき囁きの声が心の底にきこえました。

このことは、最初外部から触発される形で惹き起された同胞愛的社会正義感が、次第に水島の奥底へと沈潜し、やがて内なる魂の叫びとなつて行く様を伝へてゐる。彼が屍体処理の作業を、自らの使命と宣言するに至つたとき、彼の決意は社会的動機からといふよりも、内面的宗教的動機によるものとなつてゐたのである。

五 文明批評的価値

第二話で、ビルマ人の宗教に対する関わり方を述べた部分がある。

いつたいにこの国の人が坊さんを敬うのにはおどろきました。お布施を出すのも、それはけつしてただのほどこしではなくて、むしろ自分に代つて生きとし生けるものを救うために苦行する人々へのお礼です。呉れてやるのではなくて、ひざまづいて奉るのです。

かうした認識は、やがて自づと日本との比較に発展して行く。

ビルマは宗教国です。男は若いころにかならず一度は僧侶になつて修行します。ですから、われわれくらいの年輩の坊さんがたくさんいました。

何というちがいでしよう、われらの国では若い人はみな軍服をきたのに、ビルマでは袈裟をつけるのです。

そして、隊員たちが議論を交すという形で、日本とビルマとの両国の比較文化論に花が咲くのである。

われわれは収容所にいて、よくこのことを議論したものでした。

——一生に一度かならず軍服をつけるのと、袈裟をきるのと、どちらがすすんでいるのか？ 国民として、人間として、どちらが上なのか？

つまり、日本は西欧の近代文明を摂取して急速に近代化を成し遂げたといふものの、その反面、大きな価値を失つてゐることを指摘しようとしたものである。第三話で、今はすっかりビルマ僧に変身した水島は、次のやうに記してゐる。

私は僧として修行しながら、知りました。むかしから、この教え（「仏教をさす」）は世界と人生についておどろくべく深い思索をつづけています。そして、この教えに献身する人々は、真理をつかむために勇猛心をふるいおこして、あらゆる難行苦行をもあえてしています。それは軍隊の勇氣にも劣らぬほどです（中略）われわれはこうした努力をあまりにしなすぎました。こうした方面に大切なことがあるということすら考えないでいました。われわれが重んじたのは、ただその人が何ができるかという能力ばかりで、その人がどういう人であるか、また、世界に対して人生に対して、どこまでふかい態度をとつて生きているか、ということではありませんでした。人間的完成、柔和、忍苦、深さ、聖さ——。そうして、ここに救いをえて、ここから人にも救いをわかす。このことを、私たちはまったく教えられませんでした。

種々の限定は必要であらうが、一般的にいつて、日本人は非宗教的な国民である。吉川幸次郎博士とアーノルド・トインビー博士との対談⁵の中で、吉川博士が日本の知識階級の非宗教性について論じているやうに、特に現代の知識人において、その傾向が強いやうに思はれる。私が一九七二年から七三年にかけて、一箇年間ジャカルタで生活した時の体験からも、イスラム教の戒律に従つて生活のベースを守つてゐるインドネシアの人々に比して、日本人の生活は宗教と殆ど無関係に営まれてゐるといふ印象を強くした。⁶その意味では、竹山氏が、この作品で試みた比較文化論的な問題提起は、一九七〇年代の今日でも、依然として文明批評としての価値を保ち続けてゐると考へられる。

六 本作品の見所 (1)——detective story

的興味——

「三 登場人物」の項で述べた通り、本作品では全篇を通じて、固有な名詞を与へられてゐるのは、僅かに水島上等兵一人であるといふこと、その事実が象徴的に意味する如く、この作品で所謂具体的に「描かれて」ゐるのは、水島だけであるといつてよい。隊長・古参兵等登場人物の数は必ずしも少なくないといふものの、これらの副人物は孰れも性格の発展等はなく、単一の固定した役割を負はされた単純な人格として配置されてゐるに過ぎない。その意味では、この作品は、観念小説であるとの評価を下されても止むを得ないところがある。

そこで、この作品の見所といへば、複雑な陰翳に富んだ人物の描写よりも、意想外な事件の推移といふ点にかかつてゐる。つまり、どちらかといへば、小説的であるよりも、物語的傾向の強い作品であるといへよう。特に第二話では、水島は真実に戦死したのか？ それとも生き残つてゐるのか？ 水島によく似たビルマ僧は果して水島なのか、否か？

もし水島であるとすれば、彼が本隊に戻らないのはどうしてか？ 彼はひよつとして脱走兵になつたのではないか？ といふ様々の疑惑が涌き起つて来る。しかも、捕虜収容所といふ、外界との通信手段を奪はれた、監禁状況にあつて、これらの疑問を解く方法は容易に得られない。かくて、疑心暗鬼は募る一方で、それが却つてサスペンスを盛り上げるといふ効果を齎してゐる。さうやつて、容易に解決しさうもない疑惑を解きほぐして行くといふ、一種の推理小説的面白味にも似た、謎解きの興味が、読者の関心を惹きつけて、結末の大団円まで引つぱつて行くやうに仕組まれてゐる。こうしたサスペンス解決への緊張感を、象徴的に表はすものが、二羽の兄弟の鸚哥であつた。青い鸚哥の、原色のつややかな色彩印象によつて、謎解きへの期待が一層鮮やかに織り成されるのである。

七 本作品の見所 (2)——改稿の問題——

新潮文庫『ビルマの堅琴』（新潮社 昭和三十四年刊）所収の「ビルマの堅琴ができるまで」（昭和二八年執筆）によると、

「第一話を」書きあげたのが（昭和二十一年）九月二日だったことをおぼえています（但し「赤とんぼ」誌（昭和二十二年三月号）には「二一・九・五」とある）。原稿はゲラ刷になり、検閲に提出されました。しかし、戦争がとりあつかつてあるというので不許可になりました（中略）いくどか当局と談判した結果、ようやく翌年三月号に掲載されました。ただし、この続きは、終りまで完成した後、全部をしらべた上でなくては許可できない、とのことでした。こんなことから第一話が活字になるまでに大分間があり、それ以上にすすむにも時間的に余裕がありました。このことが、全体をつくりあげるのに大きな助けになつて、そのあいだにいろいろと工夫することができました。第二話以下が雑誌にのつたのは二十二年九月号からでした（中略）連載が終つて本にする際に、かなり手を入れました。

とあり、この記述に従つて作品の発表年月と著者の原稿執筆期間を表の形にまとめると、次に示す通りとなる。

昭和二十二年九月 第一話執筆終了

(a) (この間執筆中断)

昭和二十三年三月 第一話掲載

(b) (この間第二話及び第三話執筆)

昭和二十二年九月 第二話以下連載開始

昭和二十三年二月 連載終了

(c) (この間改稿)

昭和二十三年十月 単行本として刊行 (中央公論社)

以上の事実から、次の二つの問題が生じてくる。(1)その一は、(a)の、執筆中断期間があつたことに關してであり、この間に作者が「いろいろと工夫」を凝らしたと洩らしてゐることが、何を意味するかといふことである。それといふのは、(i)「六 本作品の見所」で述べたやうに、鷗哥を登場させてのサスペンスの盛り上げといふ、構成上の工夫も含まれるであらうが、その他に、(ii)この間に作者は、第一話における楽徳説話的主題から、若き兵士の発心譚へと、主題の転換を企画した、と考へられるからである。さう考へられる根拠としては、次の三点が挙げられる。①第一話には、水島の発心譚に展開することを予想させるやうな兆候・伏線が一切設けられてゐない(数箇所見られるのは、全て改稿時に書き加へられた部分に属する)。②改稿に当つて、第一話中に、後日の水島の発心を暗示する部分を、数箇所互つて書き加へてゐる。③物語の舞台を仏教国ビルマにおいたのは、水島が僧になることと繋りがあるかのやうに思はれるが、実はさうではなかつたこと。第一話執筆の時点でビルマが選ばれたのは、〈Home, sweet home〉を共通の歌曲として持つのはイギリスであり、日英両軍の戦線を舞台にする必要からであつた(作者は初め、日支戦線を予定してゐたといはれる)。

ただ、本作品の場合、通常の改稿と異なるのは、第一話は既に雑誌に掲載済みで、書換は不能となつてゐたことである。そこで、第二・第三話は第一話と有機的関聯は乏しいが、最小限矛盾を惹起しない範囲で、新しい主題の導入が行はれたのである。最終的には、(C)の連載完結後、単行本に収録する際の改稿まで待たねばならなかつた。

(2)その二は、(C)の段階での補筆訂正はどの部分か、また、どのような意図でなされたか、といふことである。筆者の調査した所では、加筆は全篇に及んでをり、そこから窺はれる著者の意図も様々である。整理の都合上、訂正部分を次の七種の類型に分類することにした。

- (i) かな遣ひや文字の誤記の訂正
 - (ii) 分り難い表現を改めたもの
 - (iii) 描写を詳細にする
 - (iv) 南方の風土・生活についての情報を加味する
 - (v) 水島の発心への伏線を張る
 - (vi) 水島の安否に対する不安の念を募らせるためのもの
 - (vii) 文明批評的論調を加へるためのもの
- 以下、その各の場合についての実例を掲げると、次の通りとなる。

「赤とんぼ」 ⁽⁸⁾ (「」内は掲載月号) (数) 頁数を示す		単行本 (「」内は新潮文庫) (頁数) 行数を示す	
(イー1) とうく雲の中に光つて いる……	(3170)	とくく雲の中に光つて いる……	(2311)
(イー2) 大へんしづかでした。	(1049)	大へんしづかでした。	
(イー3) 友達同志 (3157)		友達同志	(7111)
(ロー4) 合唱が終ると、隊長は いいました。「(中略) 今度はあたらしい歌を 練習する。おわり。分 れ」	(3159)	合唱が終ると、隊長は いいました。 「(中略) 今度はあたらしい歌を練 習する。分れ」	(1011)
(ロー5) 小学校の卒業式でうた		小学校の卒業式でうたつた「あおげ	

つた「あさゆうなれに
しまなびのまど……」

という、あの別れの歌
でした。〔11―62〕

(ハ―6) このときはビルマ人の
案内人をつれていたの
ですが、この人がいい
ました。そうして額の
汗をふきました。

〔3―69〕

(ハ―7) そのしばらくの静寂の
あいまに、はるかかな
たの谷底の水の音がに
わかに高まつて、はつ
きりと聞えました。

隊長は刀をあげました。

〔3―77〕

(ニ―8) 御馳走もできました。兵
隊たちは大いによろこ
びました。

村人たちはしきりにも
てなしてくれました。

〔3―70〕

(ニ―9) 捕われの身で、様子を
さぐりに人やること
もできません。むなし

ばとおとし……」という、あの別れ
の歌でした。〔122―14〕

(同上) この人がいました。背が
たかくて、頭をすつかり青く剃りあ
げた人でした。その剃つたところに
血管がふくれだしていました。彼は
額の汗をふきました。〔21―11〕

(同上) はつきりと聞えました。す
こし前まで賑かにさえずりかわして
いた鳥も、もうすつかり寝しずまり
ました。

隊長は刀をあげました。〔33―4〕

御馳走もできました。酒までました。
兵隊たちは大いによろこびました。

がんらいビルマ人は酒を飲みません。
仏教の戒律をかたく守っているので
す(138字略) 村人たちはしきりにも
てなしてくれました。〔22―14〕

(同上) 人をだすこともできません。
そのうちに、ついに一月二月と日が
たちました(326字略) 椰子の木はど

(ホ―10)

く待っているうちに、
一日一日と日がたちま
した。あんまり皆が水
島のことをなつかしが
つているせい、一度
はこんなことまであり
ました。〔9―37〕

「ここからヒマラヤの
山が見えるのかね」す
ると、村長は笑つて、
答えました。「ここか
らは見えません。村で
誰も見たものはありま
せん。われわれはお経
や伝説でできているだ
けです」

村人の歌がすむと

〔3―70〕

(ホ―11) 水島は元来無口な男な
のですが、このときも
ただふりかえつて口に
笑いを浮かべたまま、
黙っていました。そう
して、前を見つめたま
ま、何かじつと考えこ

こまかしも役に立つて、棄てると
ころはないものでした(約二四〇〇
字略) あんまり水島のことをなつか
しがついていたせい、一度はこんな
ことまでありました。〔48―2〕

(同上) お経や伝説でできているだ
けです」そのお経や伝説を子供の
きからきいているからでしょう。ビ
ルマではヒマラヤの歌やなしをよ
くききました(160字略) その麓には、

いく千年前にお釈迦様が人間を救
う道を考えて、ついに悟りをひらい
た場所があるのです。この国の人々
の気持の中には、こういうものがほ
んとうに大切なものとして生きてい
ます(40字略)

村人の歌がすむと

〔24―8〕

(同上) じつと考えこんでいるよう
な風でした。彼はふだんから、「何
とはなしにビルマが好きだ」とよく
いつていました(264字略) いま「一
生ビルマにいて……」といわれて、
何か心にうたれたところがあつたの
かもしれません。それから、またわ

んでいるような風でした。それから、またわれわれの合唱になりました。

〔27—4〕

〔3—72〕

(ヘー12) (前後なし)

〔9—37〕

(隊長は) ふと、「自分が行けばよかつた……」とつぶやきました。

〔50—7〕

(ヘー13) そうして、彼が生きているかもしれないという見込は、もうなくなりました。

(同上) 見込は、もうなくなりました。せめて水島の遺骨か遺髪でもあれば——と思いましたが、もとよりそんなものありません(285字略)

みな悲しい気持で捕虜生活をつづけました。

みな悲しい気持で捕虜生活をつづけました。

〔9—46〕

(トー14) (なし) 〔9—42〕

(「五 文明批評的価値」の項に掲げたので省略する) 〔56—16〕

(トー15) (なし) 〔同 右〕

(同 右) 〔57—15〕

以上の中で、(付)(ト)は、本作品の構成や主題・価値に直接關はりのある改訂であると認められる。特に(ト)に属する部分は、全て後に加筆された部分のみで成り立つてゐるわけで、従つて、この種の観点は、(C)の時点で、新たに添加されたものであることが、明らかとなるのである。

(1)(3)(4)(7)「ビルマの堅琴ができるまで」(新潮文庫『ビルマの堅琴』所収)による。

(2)中村光夫氏は、新潮文庫『ビルマの堅琴』に附した「解説」中で、

「作者の思想は極めてひかえ目に、ほとんど口籠りながら表現されているが、しかし、それを訴えようとしている意図は強烈なので、作者が極力この物語がいわゆる思想的言辭でみだされるのを避けているにもかかわらず、読後にわれわれは、ひとつの思想小説としての感銘をうける」と評してゐる。

(5)「日本と西欧——宗教が知識人に持つ意味——」(「中央公論」昭和三十一年二月号所載)

(6)詳しくは、拙稿「インドネシアでの日本語教育」(「表現研究」17)昭和四十八年三月刊)を参照されたい。

(8)東京大学教育学部図書室所蔵。

附記Ⅱ引用文は、「赤とんぼ」に拠つたもの以外は、新潮文庫『ビルマの堅琴』に拠つた。

(五一・一〇・三一)